

## 四旬節第4主日

ルカ 15・1-3,11-32

2016.3.6

クラレチアン宣教会 ジョン神父

### 大きな腕を広げた人となって

わたしは中国の内モンゴルで生まれました。両親は羊飼いで、300から400匹の羊を飼っています。わたしは羊がフレンドリーなので大好きです、羊たちは子どものように決して怒ることはないのです。よく羊と遊んでいました。

冬場、猛吹雪に吹きさらされると、羊たちは簡単に道を見失います。特に赤ちゃん羊を生んだばかりの母親羊はそうです。お母さん羊は決して子どもを野の中に放ってはいません。わたしの両親もそうでしたが、羊飼いたちが見失った羊を見つけ出すと、どの羊の家に戻すのかを気付くことができます。赤ちゃんを産んだばかりの母親羊を探し出します。そしてついに赤ちゃん羊を生んだばかりの母親をこうや荒野の中で探し出します。お母さん羊はこのとき生まれたての赤ちゃんを必死に寒さから守っているのです。このように動物の間にさえ愛があります。お母さん羊は生まれたばかりの羊が自分の子どもだとわかるので、決して離れることはありません。そのことを時々振り返ると感動します。

四旬節の季節は、神さまとの関係を改めて築く時間です。放蕩息子の話は皆様がそれぞれ関連付けてそれぞれの思いを持っておられると思います。放蕩息子は彼の父親からすべてをもらいうけて家を出て行き、好き勝手に何でもしていました。そしてついに、下の息子の方は生き残るために大変な時間をすごしました。彼は豚の世話をして豚の食べる食べ物を食べていました。

ここで大事なことは、下の息子は自分の罪を認識していたということです。「おとうさん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と世ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」

認識するという動詞があります。この言葉は、下の息子は自分自身が罪深いのだと実感しているのです。四旬節の季節は他人の限界ではなく、わたしたち

自身の限界を認識することを学ぶ時間です。人は簡単に他人を裁きますが、自分自身のことを見ることは大変です。

下の息子がすべてを欲しがり出て行ったときも、父親は黙って彼を行かせました。四旬節は本当の愛を認識する時間でもあります。

愛には二つあります。一つは肯定的な言葉で“to love 愛する”、もう一つは受身の言葉で“to be loved 愛される”という二つの形があります。

一般的には人は愛されるという言葉が好きです。誰か僕を愛してください!!! 愛が必要です!! 僕を見て!! 愛が必要です。まさに天のお父様はわたしたち神の子どもたちを愛してくれています。下の息子は父親から再び愛を受けられるとは決して考えてはいませんでした。羊たちはどんなに天気が荒れようと大自然の中にいようと、決して自分の子どもを見放すことはありません。下の息子は愛されることだけを望んでいました。

愛されるとは自分の事だけ考えていませんでした。

愛するとは自分の持っているものを与えるという行為を表す言葉です。父は持てる全ての愛を下の息子に与えます。

下の息子が家に帰ってきたとき、父は決して責めることはせず、批判的な言葉を一言も発しませんでした。ただ抱きしめるだけです。これはゆるしと愛の抱擁でした。

もし愛があればそこには赦しがあります。動物の愛から人間の愛までわたしたちは多くのことを学ぶことができます。

わたしたちが自分の限界について認識し学ぶことができる時、わたしたちは神さまの真実の愛を知ることができます。神の愛は愛される愛ではなく、彼が先ずわたしたちを愛してくれたのです。わたしたちは自己中心的な陰から離れて歩かなければいけない。

愛されるのではなくわたしたちの隣人を愛しましょう。

親愛なる兄弟姉妹の皆様、神がどのように愛してくれたのか振り返りましょう。神の愛にどのようにこたえるのか。わたしたちは神さまがわたしたちをゆるしてくれたように他の人をゆるすように呼ばれているのです。